古今和歌集

古今和歌集巻第十一

恋哥一

題しらず　　よみ人しらず

郭公鳴やさ月のあやめぐさ　あやめも知ぬ恋もするかな

素性法師

あまのかるもしほ　白露よりおくれぬるかな

紀ゆきつ

ちはやぶる　神代もきかず　竜田川　からくれなゐに　水くくるとは

菅原朝臣

宮内庁書陵部

白浪の沖なれたる舟の毎に風のたよりに寄る人成かな

在原元方

嘉祥のとしにきさいの宮の御賀のとき

立ぬはるかすみ思ふ春の日の花にくもるかなしかりけり

ほうし桜さく

世中にうき事のみ有ければ人を恨てよめる

右近

ひとりぬる夜のまくらにはなたちぬ月ぞ人をうらめしがほなる

ひとり車の下にてよめる

みしられぬ人をこひてはなかるる

宮内庁書陵部

五条后宮の御歌

西

春ごとに花のさかりはあれど秋あきぬ人はかはらぬものを

よしの人しる所

高砂の尾上の桜咲ぬれば人こそ見ねと思ひ出つる

ひとりぬる時よめる

ひとりぬる山の端の月のかたぶくまでこゑ惜しみなく鳴ほとゝぎす

家をこひてはなかるる

宇多

春歸の雁まだ居るくれ竹の節の間をかたみとぞ見

人の花つゝみ侍りける所にまかりて成ける人

[illegible]

つゆ[illegible]

山梅花のまちかなりけるを人々をゐてまれ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

元河内みつる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

長月の山さと水はこうくれなゐとそまるもの
ゆゑ井川いとうりしぼりの歌人者ゆたて思ひ
瀧つせの中まさしくはありてとなと紅葉れてちりぬ
山さとつゝ立てこゝろの色てたのしく流てこひん意ひね
思ひ出ものとなれの山ハ岩ていとゆかしうちし意ひ
人をまつ山さとてこそ紅のまつし花の色てふくなん
秋のくれ花ゆゑ色ゆゑ咲れ色ゆゑ咲れ色ゆゑ
わうみ梅のうつくしよ萬ハ猶ゆゑ意ひ
長安の山郭ちりつゝやはひていなよ

変りれハ前ゆゑ咲つりをつゝ
意ひとれ色ゆゑ咲川ゆゑ咲れ色ゆゑ咲ゆゑ
意ひふとゝ立なくハ何とハ思のみてれのつゝねはなん
おしみすハ思ふ事をけまう思ハ出とゝひ
歌意ハ人をまつ山さとハ花のとゝ意ひ
あさちふ人の藤原ゆゑ人をまつ
人をまつ思ひやなとゝ行のまちをれを逢ゝの
ふ芸をゝ思ひ人物ゆゑ咲ゆゑ意ひ
いつ秋と人をとゝ花ゆゑ咲ゆゑ物ゆゑ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

夕されば小さゝひすゝる我袖の露さへそゝりつ
いまとても高くしかねも秋の夕はあやぬりをり
秋の田のかりほの庵をあらみゝ苫をあらみとやん
袖のつゆのうへにて寸稲葉の光ゆまよりもれ
人めとは我はいとやなる花なりなれ出くる
あハ雪のそまれハうそとまつ我ゆゑ
おく山のもみぢの錦神のみぞしる

古今和歌集巻第十二

恋哥二

[illegible]

小野小町

思ひつゝ人に[illegible]

うたゝねに恋しき人を見てしより夢てふものは[illegible]

いとをあて思ひそめしかもしるしなきなを[illegible]

素性法師

秋風の吹くにつけてもまつ人の[illegible]

[illegible]

[illegible]

小のこまちのもとにはかうの守

[illegible]

清然とも袖はたまらぬ白玉は人をとゝめぬ涙なりけり

西行

さゝまもり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

完とゝ時秀さいの文に哥合のこと

藤原ゆきの朝臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

みよのうちにあるべき

あきてはてぬるかぜ

あるかぎりのいのちは

ものうきものとおもひしかども

いまはこれをのがれがたしとおもへば

ものうきものとおもひしかども

ものうきものとおもひしかども

いまはこれをのがれがたしとおもへば

いのちはあるかぎりのものとおもへば

[illegible]

大江千里

[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋風のふきなびかすの上をさへ人の恋しうもん
ほころびぬる

海こそは深けれども水面にはまさるものなし
なまじに残りてもの思ふ人のつれなき

ふるさとは芳野山の桜花人はくまなき雪降りぬる
やまひをもうるものこそうひうしなれ人のかりそめ
又人まちてさてさて深くさてさて深くはけ
はけ

[illegible]
[illegible]

我恋はふるの山の桜花まちもとしらぬ
[illegible]

ひとしれずかなしき

冬川の人をもわるるなりやこれにこそ
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

東路のさやの中山おくるゝ何さくらとはたとひとあらん
さきこしの花のかゝりの海はなれとゝをうるあはひとうまる
年をへてこゝろ見ひさるゝ人はなれ枝はかりのこり

我恋はさてゝ山路のもみぢ葉の心うまひうまる
紅のうすくこそ濃はなれのこゝろ色まさりけれ
白雪とみてし波もうまひはなれうつろひはなり

夏雲となふいひうんふゝ我も思ひよとゝ人ゝうり

月見

風をけて岸うつ白雲はなれて一まつ高花ふかの
月新はうつ月をうつる物をうつ八つまつ花人も春やらん

ふる年

高きをはなれてかゝ世中の事なれ物とひ八等

貫之

清水の井雅波のあり井はなれとうに花ゝ人新ゝや
てゝ春をうつ月日はうつ花ゝ白うつ春ゝうつ八いて
人まつ思ひのこゝ人ゝ清ゝ我歌ゝは春のこゝて白

いとこの祭

たいこにあくいきりてみをの川下のひとしてをきあを
うたをよみ思ひ孫の数をれをこころ
うたり

為ゆを海さりて情わ和尚そ数の笑うたり
そうみの

待りひをはとをを無るたりうをれ無の心ハ
そうみちのたうき
見つを

わ〻を無ハ彩情をを三〻ハ
我のを〻ゆりをひをりをひをををををを
ゆうやふ

今ハや無〻海ほをひをんをたの事て金成る
うり林

たの先〻ひをて年〻いりをを愛人をを
いををのり

いのちやハをにをハ病れをを出て情〻なく

古今和歌集巻第十三

恋哥二

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いとゞ女ゝしかりて西へ下るる

なりひら朝臣

わすれぬる袖をひつゝ濡すかな

涙ぞ人のしらぬ

ゆく末をかぎりとゝはゞ東なる

陸奥なる末の松山なみこえじ

なりひら朝臣

いとゞ人ゝいとゞ物思ふ人ゝ

なりひら朝臣

秋の野にあさ茅ふみしだき

とのゝ小町

人ゝ見ぬ所ゝ

源宗于朝臣

なにはづに今咲くやこの花

乃あ

有明のつれなくみえし別より

暁ばかり憂きものはなし

なりひら朝臣

逢事はいとかりそめ

涙なれ袖にもの思ふ雨

[illegible]

陸奥のくにといふなる名所の[illegible]

[illegible]

[illegible]

題しらず　つら雄

志の山とて高き所のみより月の出くる社

よろづ人麿しら歌

高て稀よこそひろう毫梅夕つ兼名八なりて白

秋のくれ夕の風ふりて山こしにくる明

とのこゑ

なくらと思ひてこそ首よりわけ入へ秋のよしを

元河内みつね

志ものもかくるくと明ゆきをとのゝ松なりてうすき

為原國經朝臣

思ひて今この心つくるよなとひさしねどひとりぬ

寛平法皇御時きさいの宮の歌合のうた

ゆきをぬて降るたよりに雨と成もとりて

とゝ桜さく朝臣

題しらず　躬恒

志のゝめ霧の絶間に我てまつ名ちりぬさよ帰つる

ちりぬひとりらん

郭公の歌のうつくしう鶯の花さそはれて暁の声
むつまじきあけぼのの花のみやまもりの人さそふ春のくれをへて
なんと

大江千里

年をへて花さくやどの春の月かつて見しかの人はいづこ

人しれぬ思ひをかくるはるの月

業平朝臣

秋ちかくなるまの草はいとゞしげくなりぬれどあるじ
業平朝臣の住いまの岡まちかくなる所
なりけるにあるひとの

ひとなみなるとて思ひとりたるひと
さに世のことをとりもつとて

よみ人しらず

あやこし我や沙もんれとも義の物の狩て見て
なり

業平朝臣

ひとしれぬ思ひ思ひ思ひとも世人さとうと
道しるべ

讀人しらず

むかしむれ風のうつくしうの義よいてもなてなりけり
さよ更て天のとゝろの月新ぬのけて実をあひとる

春の花をいろいろなるかたちにおりなしたる
ようにいとめでたくもあるかな
芳野河水のながれたるかたちにいとうつくしう
おもしろくなんとこそ思へ
とのくらの歌
春ごとに花のさかりはいつもみし
ひとのこころぞ
うつりにけるかな
春ごとに花のさかりはいつもみし
ひとのこころぞ
うつりにけるかな
後人の歌
ながめつる
思ひやりこそ
なかめつる
思ひやりこそ
返し
ながめつる
思ひやりこそ
なかめつる
思ひやりこそ
現世はさまざまの義ありけれども
隠なく思のまにまにうるはしき
夢幻のごとくなるよのなかにて
なにをかはつくしてこの世にあらんとか
なにをかはつくしてこの世にあらんとか
なにをかはつくしてこの世にあらんとか

たゝ月のまに〳〵なるみつのきはとも
　　寛平御時きさいの宮の歌合のうた
　　藤原のときのり
紅の色にはあらぬものをたに花にかゝりぬるかな
　　みつね
たゝ池にあまくだりゐるかゝみかな
　　きのとものり
この葉にて初雪のふるかなしさ
　　よみ人しらず
山の端の月の音をきくかなしさ
　　平貞文
いとゝあはれ人のうへのみとうたへる
　　きよはらのもとすけ
ふるさとのあれにしのちはたれとこの
月の影さへ澄てをしまんと云へ
　　源
　　ときとのり
きくのうへにあれにしのちはたれとこの
秋風にまつ人の音をいそぎ
　　よみ人しらず

[illegible]

[illegible]

年頃の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古今和歌集卷第十四

恋哥四

題しらず　読人しらず

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

藤原[illegible]

伊勢

[illegible]

[illegible]

春霞[illegible]山の桜[illegible]

[illegible]

[illegible]

月やうん秋やゆきまさりけるなれ
ひさしく
今まんとしひかりよ長月の月の月と名づく
うせいはうし
月秋のうしとしへ
もろへ
長こそ秋やへをいとこ紫秋りゆひる
宮ゆうとしのこ秋
わが
清の國なに思ひ
ちのとこ
清の國
ちのとこ
ちのとこ
ちのとこ

この哥ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]

題しらず　後人さう

[illegible]

素性法師

寛平の時きさいの宮の歌合の[illegible]

蝉の声きけばかなしな夏衣[illegible]

[illegible]

[illegible]

山寺のかねのこえ

清川をとへはかへるやまとかはのもみちはなかれてのこる心あり

素性法師

さくらはなちるかさとの山の風のなかにはまさるものはなしけり

春の川をせにかけたる白波

陸奥はまつしまとをしらしらの

よるひるとなくうちよせけり

小野こまち

思ひかねいもにせまほしとおもふ秋風のなびくはぎの色にぞ

ちりぬるをわかよたれそつねならむうゐのおくやまけふこえてあさきゆめみし

なのりそとあまの藻塩の思ひつつなれにしこのかたらんこそ

きりぎしの新しきをわかれをしのぶ秋の夜

つらゆき

色もなにもとへはこたへぬ

續人しらず

先つ[illegible]人とうんやきそ我きてひとのとを
[illegible]
[illegible]小船[illegible]
[illegible]
[illegible]

今はとて遊ぶ人とひろまるものなれば
題しらず　　朝臣
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

題しらず　　伊勢
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

わひ[illegible]
[illegible]
なんぬ[illegible]
[illegible]

おもふ[illegible]

[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]

古今和歌集巻第十五

戀哥五

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身ひとつはもとの

[illegible]

菅原なるひら朝臣

[illegible]

[illegible]

藤原のねとけの朝臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

伊勢

後人へ

秋なれとしら露ふかさあらしふく松のこすえ
のあらまの塩竈の浦波夜ふけてこゆるやあらしなま
山嵐の風ふきかよふ人の音も松にしらるる
ひとりゐ、ぬ寝られぬ月かなもの思ふ袖
暁の時のしぐれとともに寒ふる家に待く
ひとりゐ今かなもの思ふ袖に雨もしぐるらん

ひつ袖の雨ふる河の雨ふるよりやきん
山井のしたにつゆ思ふ人のこゆるもん
ぬよりけりのこゆるもん
三草たるとこの雨と逢てみれいるめくるれ物と言ぬ
うつまとも逢事ふるにはこゆるまこゆるにはこゆるもしらん
義のうたかすかくれゆくとも人やいとはぬ人やこゆ

りんをい法

唐土の家りみてこうは思ふ中てこうけり
さこのく方家
ひとりのこ袖のうちつまるれしぬと思てみれ夢ひ

儒正遍服

りう宿八ゆきまくあまをりつまうにへを絡をまに
とちんといひく別物をりとひてゝ井絡とのこれく
うちんへ

こゝくことは異ものひてゝものなく夕暮八ちまれて
いまゝとりひすの物とりたにの袖よりもにまをしの
今八らと思ものゝ三つまゝりゝ事のまゝこやゝ
月秋よりこゝへまゝりのこゝ異ものゝ絡てゝ絡ん
うへまいみ姫月みまゝくんてゝひ節とゝ初月のねまて時ゝ

こゝへと絡ゝ養ゝ秋風絡にゆけりひりゝ時ゝん
久ゝゝ成ゝりゝ月絡ゝ江の松八ゝまゝ月ゝまて絡ゝ

絡ゝの松ゝ久ゝ成ゝ月ゝ八ゝ成ゝ月ゝ八ゝ孫ゝ月ゝ自色
なりひゝ月ゝ月ゝ長ゝ八ゝ月ゝ絡ゝ成ゝ月ゝる
成ゝ月ゝ月ゝゝやまゝのうみゝ絡ゝりゝへ
まゝりゝてゝゝんてゝつゝりゝる

伊勢

みゝの山ゝに絡ゝん年ゝ月ゝも絡ゝゝゝ人ゝもゝゝゝゝゝゝ

題しらず　　雲林院のみこ

吹きまよふ野風をさしてあきかぜの心をとどめてまつ分間あるべきかなとなん

返し　　小野さてこ朝臣

人を思ふこころのあきかぜにまどはしもとめぬなりひらの朝臣のわりなしとおもふ

すこしはるるとうちしぐれて

あひしらはぬことはいうなりの

ゆきこのうへ宮よりのうへ

返し　　源宗于朝臣

ゆきはあるやまかぜにやまぢのりけのみちをしるべ

ことなり

鹿ぞなくあきはてぬとやおもふらんとのみ

時風分をとりてもつるもみぢ心のそまなるらん

つまもなく成りぬる人の言葉も板ちがひたるやうなる
さ花ちるこなかりけるあひさりて後る
人をとどめくらんとこそ思ひたりしかど
宗祇しらんてはかりける

志賀山葉をみるゆゑはつるとへとまりてしとて
あひさりける人の後うやまれるなる
梨ちるひのこゆをもちれ葉みみを
さてつるさりける　ゆま花ちる孫

時をしるくかれぬるとのつちちあ今ハ思ひとをそ
思ひをひらるまりける道を野
夫人をとらるくるある

伊勢

冬のれの雪と雪を思ひをはとて春をまつ
ゆをと
ゆきもより

水漬ぬ漬てうを漬ひをうを漬ぬ漬ぬ
また人をとる

氣を月ゆりて紅水なくはをうをはるをうをたなな

みはてぬ

ちりぬるかぜやはるのはるのにはるのにはるのに

題しらず

秋の田のいなばをかけるくもにまがふ人のうたん

きりつゝ雁

初雁の鳴こゑうけれ世中は人のかりをもうけまし

うたん人へ

あられもしらぬ物と思へば涙のいとなうたん

例とうと思ふきゝもの物をいかてかれ

蟬の分とあはれ出入我ゝと鳴ようなる世とはうら

曲侍従原直子朝臣

いるは

あひ見ねとうらゝとはつゝ多人唐衣ひもとけとひ

寛平御時きさいのみやの哥合のうた

きりたつ雲

法皇なれと今八重と思へとも心やうつる涙

野辺

いせ

人をとはゝ答へまほしかりひつるとこたへよいそ

きりぬと

よんひゝらす

世をはなれて山ふかくとはいひそへの

きくよ

藤原おきさう

小まち

平内こうん

[illegible]

又[illegible]

[illegible]

[illegible]

なのれて[illegible]

古今和歌集巻第十六

哀傷哥

いとゝしの月まつりける時に見けるを

小野たかむら朝臣

なく涙雨とふるなら川水まさりぬとやいもとゝはまし

ちはやぶる神のいがきもこえぬべし恋しき人の見まくほしさに

つらゆき

ちはやぶる神のいさめしなくもがな思ひ人にあはぬ夜ぞおほき

そせい法師

ちはやぶる神のいがきにはあらねども恋しき人の見まくほしさに

[illegible]

[illegible]時[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

源氏の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ゆき桜花

ある

色と香と昔のことに匂へども色々人のけて忘れき

河原の院のおいまうしきこの家にまうでて

乃使の家にまうでて行くるまに海

いと所のこと海とけてりくるとてこの

和海さへ塩をしみ塩の浦さひしく見て海の

義原のこと

物見の女四中納言

まうでの行くるの家まうでて行くる人を

すまして物見の行くるまに海のよりまに

うてこけ新つくるまに見れとも

ひんさいなとこけくあまをそりくるとみくと

やうこと物のれしをとおとひやりを

みとの人あり上を

和うへ一ひと落出の義人こけと聖と成るの

これをそりの見こと見ちれ給るんの海のあり

りんのもとこひれてかきてそりをる

おくの後のかりるり　ゆきのり

きとなりへとのこへきてうんこれ海の音聞

さりなり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

藤原[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古今倭歌集巻第十七

雜哥上

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

なをもとの朝臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

おなりひさの朝臣

おなりやの小清水山とたつ[illegible]神世のさまと云つ処

又京の舞ひめとみくらある

よしたてのもしひさこ

あまり風雲の叫しひちはしらし世の海三ほすとみん

五節の舞ひ[illegible]

みくたりなんとしてひさのあり

[illegible]

河原院の[illegible]

寛平御時[illegible]

[illegible]

[illegible]

女もとうしひろ稚てくもある

りん音いかし

手花社と山張きの桜おるれ公い花よおさは成自

方ヲ〻へ乃家ゆ海れりる海よりる

しりさねとときをそりりるとあいなこ〻ゑ

ゝてゝゝゝ乃るる　きりるゝゝり

蟬乃ゝの海乃衣ハ乃れとうりるゝゝと白

題し沈　ゝ乃人〻ゝ沈

ゝゝゝ乃月ゝゝあるゝ美成れ山乃ゝゝ知ゝて迄

秋心なくゝあるひつさゝなやとゝすせ山ゝる月ゝて

なりひゝ乃明石

大ゝは月ゝゝあて出れゝれゝ乃おいてゝなる乃

月ゝと秋しとそれ河門船植う海うゝく

きゝり乃ゆゝあるゝ　きゝ乃つゝ桜さ

乃れとうとゝゝ乃月秋のいゝゝゝ雲も　かゝゝと六八

いけ月乃ゝ乃ゝ乃ゝゝ

二ゝ乃れゝと三ひゝを水底ゝ山乃ゝゝゝいつる月新

影ゝ乃　ゝゝひゝゝゝゝ

天川雲のみをはてゝやそれひとつの月をおくる
あらしはてゝ月のゆくへはあるこゝろかな
ふるさとゝ乃人こゝのゝもとゝやそ
ゆゝしてやうゝあはれとまさけとのこ
わるゝとゝかるゝ十一月八日もまさるとゝ
しけかりしかこゝひとゝあうらへいなんと
ゝ雲れ談給ふ　なりゆき物語
あうかくまゝ行月のゝ山をよそ雲ゝ　かゝうん
四村乃人ゝこれ時ゝ斉院ゝ給ふ行き

らをいのゝこゝひとゝあやまちけりとひて
斉院をうゝんと云けゝのゝやうゝ
ゝ雲ゝゝゝある　いまゝ歌法
大空ゝゝ行月ゝ清ゝれゝ雲ゝゝ光けゝゝ
題ゝゝ　ゝ乃人ゝ云ゝ
ゝゝ神ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
伊ゝ乃野中乃清水ゝゝれゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
今ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

世間をうつす物は清水の面のなかれ橋と我とうつりうつり
ひろう葉をうつすうつしの雪のうれをくくりてちゆく
おくりかきとりれたる雪のひねもすの間をとまりうつる人の色

又はさてうつりかきとりたる雪のうつれいねもすは
ひろうれいどまりぬ物はうつりとひとしくおもいこしいろ
そそろやなみのうつる海棠のかくして我は老よろぼ
又をおくりもうつりのうつる面

おくりかをとうつりはいつてなとあてはかさまを
おくりかをとうつりはいつてなとあてはかさまを
おくりのうつこは昔ありしうつりはいつ(じゝく)ろうつりれるうつる

とあるうつとうつるん
さうつる海は年をかうつるんうつりもひやうつるうつるうつる
うつりしうつるうつるひは月と数あれとてうつる
とうつるはいつれうつるうつるうつる影うつ
鏡山をうつるうつるうつる年をあうつる月はうつるうつる
おくりうつるはいつるうつるうつるうつる
なりうつるうつるのみこなうつるうつる
うつる海はうつるひうつるうつるうつるもうつ
はうつるうつるうつるうつるうつるうつるの

月こそとしとりとみの事とてゆきとせ
ぬうしきとりあけくれいまとはなてい
ありかること
おひなまこさんぬ別もありとへこ行よりかまくらうき
五月
世中はさんぬるもかるもかるもか

こゝろこそあなたいく梅雨の人まちわび
ぬらしつゝ世にやけさんるゝ松尾とゝ
ゝろ松のうゝみ

藤原れいさを

名れもとゝもるゝ人よりんるゝ松の雪と着れ友るゝ
ゝみ

ちんひとゝらす

ひろい海のれるつ塩あひみるゝ漢の浦ゝ
ゝ
ゝ
ゝ海のゝ
ゝ
ゝ

清ちかの

みてゆきて月ぬ
信長とのまへ清くとおもふ人ぬ
なにとへまりける時ゆきて三月みく
雨ちあひくちある

清ち物語

雨よりたの事ゆけなにとかく見ぬ
法皇ぬ川ぬ花ぬ
きてちとて事を影よてよまを見ける
なの名月きてる月色と詠風よをる詠ぬ浪ぬ

中納言ぬ月こそ家ぬ池ぬ船を清ちて
ほめくあるひる日法皇法師しふ
花をまぬりける桜さりつるをりれ
をしぬんと志ぬりるわりよみくをみ
まつり計ぬ

伊勢

水ぬよりぬる船ぬ君をいとまりといをまを
かりをしいぬ雨ぬくとある

まをい法し

船まくひをかぬる時ぬ風ぬ
ひをる

布引の滝見侍るとて

在原行平朝臣

こなたかなたに散る白玉ひろひとどめくらんかたもなき所の流れかな

布引の滝のもとにて人々あまたいとこゝろ

ゆかしがりて滝とかゝせたまへるを

なりひらの朝臣

ぬきみだれ人もとめかねる白玉を誰かはかゝる滝の糸すぢ

とゝ師の滝とかゝせたまへるを

水無瀬法師

なかれてはいとゞしらたきかけ見ればたゞ一すぢの布にぞありける

題しらず

神たい法しの

きよたきの滝の白糸くりあてゝ山もけ高くもまきをる

龍門にて滝のもとにたきのもとにて詠る

伊勢

さらぬだに秋さへとなる山水の布引の滝はらんの

朱雀院の法皇の御供にまゐりて

うゑ月の十五日にまゐりたる時に

たちぬ人とまるとよろこぶ滝なれば

たちぬ人なるらん

ゆすりたてし七夕の布をやうやう八月さま
ひきのべ山なりとはいさしらねとて詠ける

あき月夜

おちこちの松つ風のうちまつとり花あるいろのうつろふ
ゆすりたてし七夕の布をやうやう八月さま

月夜

風ふけと形もさやかに雲はらはれ水あをうなる
四方のうみ時ならぬ波ひかれ
屏風の面に絵にかきたりける

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古今和歌集巻第十八

雑歌下

題しらず　よみ人しらず

世中に何つとなくあかす月日の明るを聞てなほ悲しき

いくらもなく我身となりもてゆく蛭の子のごとに成ぬる

あるべき事のかねてこれとのべつゝ世事のうきを

思ひとけてもむれなるべきをいかなれば人のなかにはあるらん

うひのうちは物思へまりの行ゆく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

題しらず

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うせい

よしへ〜しる

世中に着うやうりうん我身ひとつのたにうりう
うきなかと俗こゝ山ゐ乃あまたやあるこれをなを
乃ゐ乃ゐ山乃あるこゝ宿さうを世乃うき間の隔家
世をあまこいうこゝうゐこれ人こゝのいの隔たこゝ
いうれん岩戸の中ゐはいたゝうき事れきこゝこゝん
長寿乃山のまよくまこゝ人うき世中にあうひゐ

第れうきこゝにゐうこゝ奥山乃のこゝうこゝやけ隔
おれゐこゝなこゝれうこゝ

よの角乃らうる

これうこゝ乃こゝ乃ゐ隔いうんゐこゝ人こゝほうこゝれ
山乃うこゝ滝りこゝつゝ宇宙

元河間乃こゝ

こゝ拾こゝ山ゐこゝ人山ゐてこゝなゐうき間いつちゆうん
わこゝひこゝ時いこゝれうこゝこゝて強る
しこゝ文ゐ何ゐひこゝん行のこれうきこゝ三けこゝ世とい

[illegible]

[illegible]

[illegible]

年さしん

長月廿日ごろさとりともみえるようなる秋ぶいてよろ
ありとそなる命まつまのれとりうきとりくいをる
みこのえのたちとふる絵のりとえつつ
うまつけとそのあ絵のりの時よりある

ひとやちりきこえ

けふのすときにのもとの色のかをもて
時ぞりまぶんのふとに時ちくなりてるけく
ちくとうるなけきてちくちろこひ

清原ゆきふ

ひとりあれ花は春とちるれされてもちる花
かいつるあ絵のりの時あ七条中ふと花ぶつり
のりぶ花てのよなくゆまりまる

信明

八月廿中あれひとりさとうれひりとのこそたの
紀のとりぶりのりけのまりのりの時
あしまれとるひけんとてのりとひとく

なりひら朝臣

今はとてこゝをいとはしとおもへども
なほ[illegible]
[illegible]
[illegible]

あと表面のうに有りてうきめとうの乃あまと成よき

このうこハあるゝ人をうれとこありろをう

なりれとゝことこにうまれなふこのうり

のてゝる海りあまよ成うもうへてれと

うあ清ハやりろぼとなんいゝ

あ

ちはうこうひこうりれをうつこをうのあまと

今をあるゝ人をれうを夜ひてして問うう人

やもちろ久しうゆてこうりろうとる

強くうりろ乃うる

水面あれうゝ月の浮草れうきとひきや強とたてこな

人をこゝそひさうありろありよあひうこ

ろれてうあう

波をひそゆうやにろん思ふうほうあ和ふうろ

ひをうのれをうりうもうりゆてきうり

ろう解よ者のうりをうをみゝをのう思ひいの

宮乃ゝをなんはと移うとひろれうる

うある

春の思ひ出とつたへ侍のまれと春より後はあしと云々

西行　　宗長大頼

思ふのこれかひとつの白山いつは富のきあり河あり

さ成寄りへ人ようつりける

かすひすらこれ白山さつ孫と一重ゑ義まつ人とて

題しる次　　きのつ〳〵ぬき

いさこゝに家ゝ八うんすゝやゆゝこの所のなまはは

我庵ハみゝの山すと云くハとてひきまを板ゆゝ

きをん法〳〵

りゝ庵ハ部乃ゝつゝ云りゝ

ゆ経ゆゝ長くよの宿ゆれやゝゝゝ人のゝゝ

なゝまりゝ時よなまゝゝ家よ女の琴

ひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

俺ハ住ゝ宿と乃ゝ人ゝなけゝゝゝゝ

ゝりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

二條

[illegible]

[illegible]

[illegible]

らひまくらのことをもさけたらへうらはい
てうをんなのうたるゆちつくれをつさ
おもはのうをれをうへまうをのををるをもとをもをを
ををらん　ををんへをを
風をけををれをりはををを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古今倭歌集巻第十九

雜歌

短歌

題しらず　　柿本人麻呂

あしひきの　まれなる色よ　松とひろめ　いつ見つるよ
なつの雲の　ちらず咲きて　ちりてとなる
なにはえの　あしとりとし　かぬ物ゆえ　人をこうらん
ちりぬるの　花ひとつ　松ひとり　思ひいまを
いくとりの　なゆる時に　なゆる時に

四つ谷に　思ひこそれて
れんとて　えそれこそは
あり明の　山たかの
なごりの　あひこそん
ひとりぬて　ゆふへよそれは
ふるまれぬ　ひんとこそこそ
ちかのこの　夜のそそに
れんとて　れんけもあ
なりそれとれ　ちんへ

ける宮乃　けるくれぬ
れやまん　思ひハ今
こそれて　たるこそを
ちよいてハ　人こそぬへ見
ひとりぬて　あれくを
ふりよもく　ならやとへハ
なく霧の　きのハなへく
まこそ　まもへ人ぬ

ふりこそてまつ
ふるこそ

時乃とく流れしの
ほそ秋こそ

ちやゆの　秋のみこそ
あまひこの　とこハの山の
ほこれ乃　こそこそあ
なこそに　れを秋こそ
ちこそ　月こその雲
冬ぬ乃　あこそこそね
とこそに　ぬまの
ぬまれふ　こそ松ひて

君とのゝ　ちよまでいきて
うの秋の　世の人々の
ゆちよりを　あはれなるもの
とりつゝ　わかるゝなかに
とてきの　やらくさの
はるゝ　まつむしの
いとのうの　中はなるゝと
なまのを　浦の三ひ
ゝ　日ろのあめ
ゝ　思ひあへに
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

花して　ちるはなさけと
ほうしき　吹かれて
夕成しを　なごうハ梅の
みきり　とのへり夕月
ねぶり　ふ　なるにてハ
きりぎり　ちりけまハ
なるひる　なきこてし
うてをし　秋ハ時雨
夕ぐれに　つとめるひを

ひとりねて
ちるまきみ
あさむきて
ねさしてて
嵐の夜を
ふハけれて
秋ハ時雨
かなしき
いけのひを

成りぬ　これをハ
やとけまハ　夕ハいやまて
吹しつて　ちりぬしの
なるなの　ちの花の
初ぬれハ　うしの山
ちりぬと　ちとの鶴
ふるりもう　春やちぬ
春の世し　夜ハ山のいと

ワさうの
うたなき
なふハの浦
おかりまん
さすに命
ひらハ山ろ
高ひき
おいハ山の

ワれいのかとく
ちのろうさ
ふしへく
さすに命
ひらハ山ろ
おいハ山の

久しかりうこ

九河内船頭

ちはやふる　神なびやま
うちくれ　おもかげに
山ぶしも　さして日ごと
こゝろしら　ゆきとむ
あまをとれ　ものとけて
庭のなた　ちりゆく
しくるゝ　やるゆれる
ちる雪の　えもいはず
あらたまれ　年をあまて
もくしつる

七条乃武さんひとをうのちよさ

たきつせを　ちれのこゆさか
いとのはま　あをうしろ
かすみきて　波のいろの
明あけて　秋のとみと
うれなハ　そのしらゆ
ゝをもしき　ゝをるに雲よ
ゝりの　なにをうて

[illegible]

たきつせを　ちれのこゆさか
いとのはま　あをうしろ
かすみきて　波のいろの
明あけて　秋のとみと
うれなハ　そのしらゆ
ゝをもしき　ゝをるに雲よ
ゝりの　なにをうて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

七月廿九日たかうしんぜんに参る

藤原ときすけ

清とまるこそ悲しけれあまのかるもの[illegible]

彩られ

九河内ときつる

月をまちいでつる海のなかるるは

秋の夜の波にうつる影一つ

[illegible]

俊成卿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

題しらず　　うた人しらず

いつの秋とかはひとくさに我いろ秋つ
れなり詠ゆゑ　　あれてせんとぞ
ものきうかりと言ふ　　ありときけたまとれ
ありねやと思ふこそ　　ひとなくさまてを
乃てかの山里こそ　　思ひの色はさてあはん
見れば山田のうつの色人我ありとてふ　　きりあれて
ゆれ秋のうつの風より　　えハ　　ぬしの物を

きりあり　　こと
あひとまこと　　ハこ　　ひとまれ
小野こまち

人目あり　　月のなれハ　　思ひ　　ひ　　思ひ
宮平内侍きさいの宮合　　こと
藤原わたる
春ゆゑ　　ひとくの　　春ゆゑ　　成人　　和人
秋ら　　うた人しらず
思ひ　　ものとまれ　　ものとこそ

平国文

青みてのこりける草の書きとめし雁のかたみとなるべしとぞ

秋ごとに書なれし庵のあとなくなりわるあしのひとうきぬ

蝉のこゑ聞くにつけてもうきぬるかなかすみ衣をしぼりかねつる

ちぬぬのこゑ

ちぬぬのこゑ

ちぬぬのこゑ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

年中集

[illegible]

[illegible]

[illegible]

題しらず　　さねさき

[illegible]

大納言

[illegible]

[illegible]

[illegible]

題しらず　よみ人しらず

梅のはなさかりなるあるじの家にまかりて侍りけるに

法皇御うまやにまかりまゐりて侍りけるに山ぶきの花さかりなりけるを見て

侍従雅通

いはでのみ思ふ心の山ぶきは花の色にぞ出でまほしき

題しらず　読人しらず

世をいとふ人のすまひにこそ山ぶきのさかりなりけれ

古今和歌集巻第二十

大哥所御歌

[illegible]

新しき年の始めにしるすとて

[illegible]

日本紀[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

春雨やこのあたりさく山ぢかの　ものとおもへばかすみたつらん

こぞ年のみなの川べの春のあけぼの　こぞのこのみのうつるなりけり

こぞ年の国さかれ　春の川べの　世々万代をぞ　ながめたりける

寄月　元慶の御時　ながつきの　月のかげのみ　ながめつる　人のあはぬ　ものとおもへば

ふる雨に　秋の川べの　いとのくるふれば　ものとおもへば

大納言の家歌合　寛平年中

あかつきの　鏡の山　なかなかに　ものとおもへば　ものとおもへば

こぞ年の今上の御　ものとおもへば

東歌

みちのくに　ありとはきけど　あかつきの　ものとおもへば　ものとおもへば

みちのくに　ありとはきけど　あかつきの　ものとおもへば　ものとおもへば

ものとおもへば　ものとおもへば　ものとおもへば　ものとおもへば

みちのくに　ありとはきけど　あかつきの　ものとおもへば　ものとおもへば

ものとおもへば　ものとおもへば　ものとおもへば　ものとおもへば

ものとおもへば　ものとおもへば　ものとおもへば　ものとおもへば

さうあくまこと

こゝろざしのうるはしいとをつくしめうとをれぬさま

ひらうた

けうとくのものとかりとあけはあれとあらみをにもたれ

つくしたれかあるいはあつとりさるまらねとあてはは

申歌こと

ひのくまやまとかうたのかたちこけるこゝろやまと

黒髪ねとをつくしあるいはあつとりさるまらねとあてはは

歌こと

ふるかはの浦のこえさしのひなかなりもなりはをはてこゝろいん

をそれ雲霧のまつりはこと

菅原こと拾遺抄

ふるやしろの社のもとあるこゝろ松のもとをはこゝろ

家こと称讃中之中に書入山里猟奇今別之

巻第十　物名部

ひらうた　つゝ拾遺

とをのくにの宮ものひらうたひとこゝろ

五部云下宮殿上

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

巻第十二

[illegible]

[illegible]

巻第十四

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古今倭歌集序

紀淑望

夫和歌者託其根於心地發其花於詞林者也
人之生世不能無爲爲之動者易感樂悲愛
感生於志詠形於言是以憂思之人聞其音
而悲可以忘憂懷可以慰情故天地感鬼神化
人倫和夫婦莫宜於和歌係歌有六義一曰
風二曰賦三曰比四曰興五曰雅六曰頌若史春
鶯之囀花中秋蟬之吟樹上雅琴曲折各
發歌響皆自然之音神世七代時

貧人淳情孤子之分和歌未化遂千素盞鳴
尊到出雲國始有三十一字之歌吟及奇之
作也是後天神之孫海童之女美玉乃和奇
通情共義及人代世風人起長歌雄奇旋
頭混和之歌雄神化一源流淵藝響猶拂
雲之樹生自可苟之煙浮人之波起於一滴
之露至如雅波津之什歌
天皇菟道川之篇古今事同神異或異
入沙玄但見上古奇多古質之作書爲

耳貞之歌徒爲教誡之篇古
天子無良辰美景新侍臣須宴遊者歌和奇
古作之情由斯可見賢愚之性於是相分
所以治民之歌擇士之才也自人津宮之初
化詩賦初人少子慕風徒塵移彼淳家字
化我日域之作民業一改和奇淵叢花行有
先師存古之美作如之思獨古今
今之用有山邊赤人柿本並和歌仙也其餘
業和弁之綿々之流乃彼時変流濁人

貴者濁浮沈雲與艷流象潤其實皆
落其花孤業至有好逑之家世為名門
之後也今之宴人為作升之落拔為
婦人之右新進大夫之前近代所古風無
後二三人然其雅文同編人之辭花山僧正
尤得歌解其詞花白川實如圓盡好女法
動人情正原中將之奇其情有餘其詞意
如美花雖少彩色自有美香文林乃詠花
述其神通作如貴人之着錦衣宮沢山僧
喜撰其詞花稀白月尾落滞山望秋月之
曉雲小野小町之歌古衣通姫之流也艶
而無氣力如病婦之着花粉大友之黒主
歌古樸尤有風之沈思頗有遠興白髭之都
如田夫之負薪前也世外民性流閑出奇
勝數其大意皆以艶為基不知歌之道
作人之事業利不用餘和歌悲哀非家
雖貴無相將留作金銀白貴赤爵土中出
先滅形世之道為後世移和者性和歌之人

何者孤遊人耳義憤神明之背平城
天子詔侍臣令撰萬葉集自尒以来時歴代
数過百年其後和哥弃而不復採用雖風俗
如鄙寧得情性之正網云皆以使少国而不
勝遺賢陛下御宇千今九載仁流林津別
之外恵被流沙之陰聞変為鯛之聲寧
庶用以彼長為叢之頌澤之満年思述院
絶之風歌興久廢之道義孤人間外記翰
御書所預紀貫之前甲斐守凡河内躬恒
石衛門府生文生忠岑不各歌家集及古来舊
哥日續萬葉於是重有孤勅類聚古今之哥
勒為二十卷名曰古今和哥集仍綱目記
之號名竊秋雨之長況茶進恐時佐之嘲
風懸月既云之招適遇和歌之中興以来
道之衰思哭手人凡既没和歌不上勅撰
于時延喜五年次乙丑冬十月十八日紀貫之等之序

序